

注意！

■この記事は発行年月日時点の内容のまま公開していますので、ご覧になった時点の法規制(農薬使用基準等)等に適合しなくなった内容を含む可能性がありますから、利用にあたってはご注意ください。

農作物技術情報 第8号 野菜

発行日 平成23年10月28日
発行 岩手県、岩手県農作物気象災害防止対策本部
編集 中央農業改良普及センター 県域普及グループ (電話 0197-68-4436)

携帯電話用QRコード



「いわてアグリベンチャーネット」からご覧になれます
パソコンからは「<http://i-agri.net>」 携帯電話からは「<http://i-agri.net/agri/i/>」

- ◆施設野菜 省エネ対策技術の積極的な導入
- ◆寒締めほうれんそうハウスの開閉による生育調節と品質を確保した適期出荷
- ◆促成アスパラガス低温遭遇時間を考慮した適期掘り取りによる収量向上
- ◆来年の安定生産に向けた土づくりを実行

1 生育概況

- (1) 果菜類や露地葉菜類の収穫はほぼ終了に向かい、出荷量は少なくなっています。
- (2) 雨よけほうれんそうは、ほぼ順調に出荷が行われています。寒締めほうれんそうのは種は10月中旬まで行われ、現在生育中です。

2 技術対策

(1) 施設野菜

近年の燃油価格の上昇維持により、施設野菜の生産コストの増加は、農家経営に大きく影響しています。施設野菜においては、省エネルギー対策の積極的な導入を図りましょう。対策には、[1] 暖房装置の点検・整備、清掃による暖房効率の低下防止、[2] 温室の被覆資材の隙間からの放熱防止、[3] 内張資材等の導入による保温性の向上や温室内の温度ムラの解消、[4] 作物・品種の特性をふまえて生育ステージに合わせた適正な温度管理の実施、などが挙げられます。県内では、空気膜2重構造ハウスやチップ・薪兼用暖房機を導入する事例もみられてきています。



図1 保温性向上技術
空気膜2重構造ハウスに空気を送り込むブロー



図2 代替エネルギー利用技術
チップ・薪兼用暖房機
(比較的小規模なハウスに適する)

(2) 寒締めほうれんそう

気象台の1か月予報では、気温は高めと予想されています。生育が必要以上に進みすぎないようにハウスの開閉により生育を調節します。従来多く栽培されていた「朝霧」より伸長が遅い品種(「寒味」「冬霧7」「雪美菜」など)も導入されていますので、品種に応じた管理を心がけましょう。十分な低温に遭遇する前に収穫すると品質が劣る事が懸念されます。県内の主要地点における寒締め開始可能日(地温が8℃以下になり糖度が上昇し始める時期)は、概ね12月上旬と考えられますが、年次によりズレがありますので、出荷開始時には最大葉の葉柄の絞り汁のbrix値が8°程度以上になっていることを確認して出荷しましょう。

(3) 促成アスパラガス

地上部から貯蔵根への養分転流は茎葉が完全に黄化するまで続いています。刈り取りは茎葉が十分に黄化してから行いましょう。

また、十分に低温に遭遇した株を利用することで、収量が増加しますので(右図参照)、5℃以下の低温遭遇時間を考慮して掘り取り時期を決定しましょう。

10月25日までの県内の主なアメダス地点の5℃以下の低温遭遇時間は次表のとおりです。

栽培面積が大きい場合には、掘り取り作業及び伏せ込み床の準備を計画的に進めましょう。

伏せ込み後に、伏せ込み床内の温度を急に上げると収量が少なくなる場合があります。

1週間程度は無加温とし、その後、徐々に温度を上げるようにしましょう。

ハウス内の保温対策を万全にし、加温コストをできるだけ低減しましょう。

表 5℃以下積算遭遇時間(10月25日まで)

アメダス地点	二戸	奥中山	盛岡	北上
5℃以下積算遭遇時間	39	81	8	1
90時間到達見込み*	11月3日	10月26日	11月16日	11月19日

* 今後、昨年と同じ気象推移となった場合に5℃以下遭遇時間90時間(株重800gの株から100gの収量が見込まれる)に達する月日

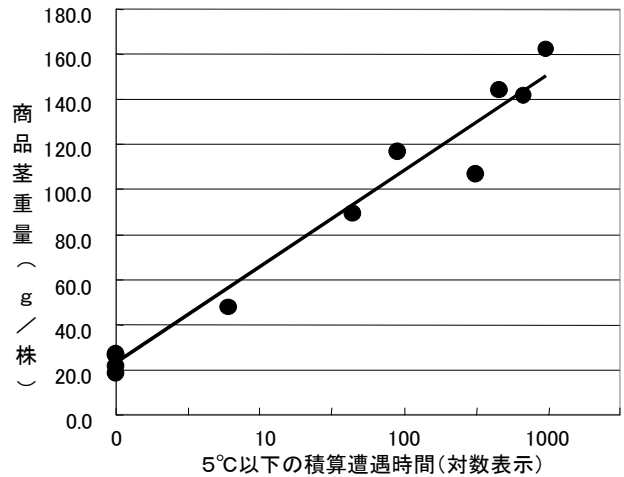


図3 掘り取り前根株の低温遭遇時間と商品茎重量との関係(商品茎: 5g以上の若茎)

(4) 野菜畑での施肥管理、土づくりについて

県内の野菜畑では、可給態リン酸や交換性カリウムなどの肥料成分において、土壤改良目標値を満たした圃場が多く、中にはリン酸を無施用でもよい水準まで蓄積している事例もあります。

施肥管理にあたっては、土壤改良目標値を満たした圃場では、作物による肥料成分の吸収量や、浸透水による養分の溶脱量など、「土壌から持ち出された肥料成分を施肥で補給する」補給型施肥基準を適用するとともに、土壌診断結果によって土壌養分の過剰が明らかになった場合には、減肥基準に基づき適正な施肥管理に努めましょう。

また、例年この時期は次年度に向けた土

づくりを行う時期でもありますが、今年は福島原発の影響から使用できる資材に制限があります。詳しくは「農作物技術情報 稲わら・堆肥等の利用について」をご覧ください。育苗に使用する培土についても、十分確認を行い使用するようして下さい。

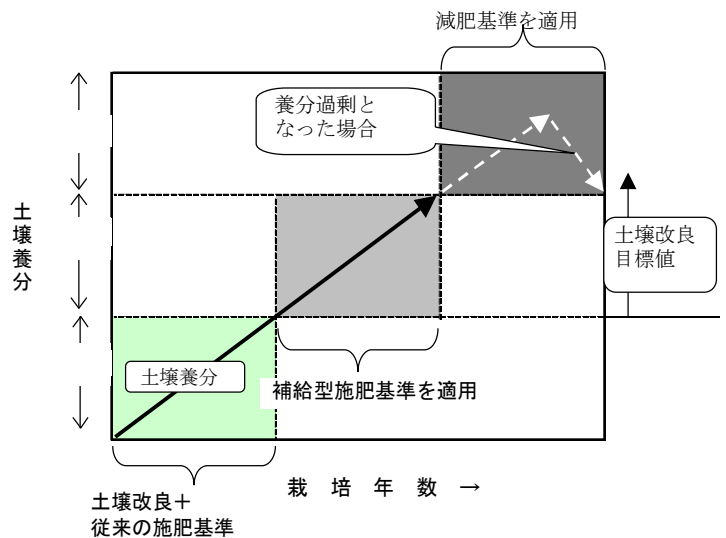


図4 土壌養分に応じた施肥管理基準の適用

農作物技術情報の23年度定期発行は今号で終了となります。気象や作物の生育状況により号外を発行することがあります。
※ 発行時点での最新情報に基づき作成しております。
※ 発行日を確認のうえ、必ず最新情報をご利用下さい。

9月15日～11月15日は秋の農作業安全月間

農作業 無事故でつなぐ 明るい未来